
ガス

マイナスイオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガス

【Nコード】

N6105A

【作者名】

マイナスイオン

【あらすじ】

…アイツら足はええよ疲れちゃった…

(前書き)

記念すべき一作目です

我ながら文才ないですが
よろしくです。

…つとに…厄介だな…

多分アイツらを撒く事は出来たと思う

てか腕いてえ…

さっきアイツらに握られたところが…って、
うわっ

なんか紫色になってるんですけど、、

あー…

気付いちやったら余計に痛くなっちまった…
このまま死ぬんですかねー…

ってゆーか

俺って、なんでこんなことになってるんだっけ？

あー

そうだ

なんか研究所だかなんだかから変な声やら煙やらが出てるって
近隣住民から連絡があって

それが普通の無能な国家権力の犬様じゃどうも出来ないからって
自衛隊的な…

そつ、わかりやすく言えばFBIだかSATだか
そんな感じの特殊部隊が召集されて

俺はその中の一人だ

ここに来た時は8人だったのに

気付いたら俺一人ですよ

つとに…

運がいいやら…

つと…

なんかまた来やがった

とりあえず

逃げますよね

ハッハッハ

だつてよ

だつてよ

アイツら銃きかねえのよ

まったく…バイオかって話だよ…

…いや、

撃ち殺せて

動きがのろいバイオの方がかわいげがあるな…

だってアイツら

速いんだもん

俺、全力なのに

常に5mくらいの距離たもってやがるし…

お

なんか

いい感じのドラム缶みつけ

コレを…こうして…

蹴り転がせば…

よっし！

とりあえず足止めにはなっ…

…てないiiiiiiii

おかしいだろ

人間の形してんのに

全然元気だし速いし
今ドラム缶割ったんだよ!?

やばいよ

22にもなつて泣きそうよ

頑張れ織田信弘

信長さんの一文字違い

名前負けしないように…

「フルパワーアアア!」

あ

やべ、

つい叫んじった

ホーラ

気付かれたよ

5匹…5人?

どっちでもいいや

とりあえず増えて、

ピンチなのには変わらないし

あー

今日で二日目か?

ここに入ってから…

そりゃ

頭もボーっとしますよ

クソッ

さすがにどっかで休みてえな…

おおおおお！

シャッターみたいな見つけ！

さすが研究所

設備はバッチリだな

とりあえず

都合よくドラム缶見つけたから

すれ違いざまに蹴り転がして

若干ひるんでるから

今のうちに

シャッターを手動で下げてっと

ふう…

とりあえずシャッター降ろしたのはいいけど

ここなによ

なんか露骨に危ない色の液体の瓶詰があるんですけど？

…飲めないかな？

…いや、やめておこう…

とりあえずここならすぐにはこないだろうし

寝よ…

…んっ

床かたいけど寝れるもんだな

結構疲れもとれたし…

どうするかなー…

…だからシャッターは開けるもんで
突き破るもんじゃないから

つとにナイスタイミングだなコイツら…

まあまた逃走劇かな… ってあああああ

ここ個室

出入り口は一個のみ

しかもその前に奴等が…

超ピンチ…

あ

効くかどうか分かんが

一か八かだな

まずは…

青いやっつ

うお効いてねえ

赤い液体って当たったら燃えるとか…

ないですよねえ…

緑っ

黄色っ

紫っ

おおおお

紫でひるन्दる

コレか

キーはコレか

そうとわかれば…

食らええええ！

よし、あらかた片付いたな…

紫ねえ…

効くかな？

俺の紫にも…

「あづああああっ！」

バカいてえよ

シャレになんね…え？

おおおお

色が

色がもとに戻った！

ふふふ

ふはははは

これさえあれば

ここを出られるかも知れないな…

とりあえず紫の液体の詰まった瓶を持てるだけ持った

多分ここは

B1だろ？

どうかで上にいく階段を見つければ出られる…

そのあとにでも

本部に連絡すりゃいいな

無線は初日に壊されたし

まあ

善は急げだな…

ん？

なんかにつまづいたな
でもなんも無いしな！

まあいいか

ガハハハハハ

道をあげたまえザコ共め

ピンを投げ付け続けると残り3個になっちまった…

やべ…調子のりすぎた

クソッ

慎重につかわねえと…

昇りの階段みつけたあ！

ここを上がれば…

…光？

出口か！

やっと…やっと助かる…

外に出た途端に
安心したせいか
脱力して
気を失った

次に目を覚ましたのは病院のベッドの上だった

…いてっ

治ったハズの腕から激痛がする

見るとそこには
焼けただれた左腕があった

本当に痛いんですけど

そのとき、

上司の近藤さんが部屋に入ってきて来て

信じられない言葉を耳にした

あの研究所で研究されていた物は

脳に作用し

自分にとって

危険か、そうでないかを逆転させるといったものだった

つまりどういう事か

例えば、本来は自分が行方不明になったために、派遣された特殊部隊に

「救助」

される事を

「危険」

とみなしたり

身体に多大な影響を及ぼすような

「危険」

な薬品が、自分を

「治してくれる」

物に変わったり

そついった潜在意識みたいな所にまで作用するガス性の新薬だった

本来は、ニンジンが食べられない子に、このガスを吸わせて、目の前にニンジンを置けば

「嫌い」

なニンジンが

「好物」

のなにかに見えて、味も違う気がして来る

などそういった好き嫌いをなくすといった初歩的なものから

対人恐怖症に悩む人にコレを吸わせて

日常生活を本来あるべき形に戻す

など

現代医学の新境地をかたどった発明であった

が

どうも中で

なんらかのミスがあつたらしく

そのガスが大量に作られ、そのまま外に漏れ出した

「煙」

と言うのは

そのガスが大量に作られたために

目に見えるまでの色が付き、煙に見えた物

「声」

と言うのは

その漏れた物を微量ながら吸った近隣住民が聞いた幻聴だった

ここで改めて整理してみる

まずは俺を襲って来た奴等

コレは現場の研究員やら俺の後に改めて遣わされた特殊部隊の奴等だった

変色した左腕

これは

ただ力強く引つ張られただけだったのだが

奴等に触られたと言った深層心理がどうのこうので
そう見えた様だ

それからドラム缶を破壊したりシャッターを突き破ったのは

そりゃ武器持ってますよね

ナイフやら銃やら

それで壊したらしい

危ない色の液体

アレはそのまんまに

普通にいろんな薬品やらなんやらだった

あのガスはまだ研究段階だったから
こんな大事になってしまったわけだ

あー

あと液体が大量にあった部屋でつまづいた物

「同僚」

だった物

あの状況に精神が追いつかず

自分を切り付けたり自分に向かって発砲したりして自害したらしい

なぜ

姿形が見えなかったのは分からないが…

んで

とりあえず俺は長い休暇を貰い

街を一人でぶらついてみた

さすが研究段階なだけあるよね

俺の目には

いまだに奴等が見える…

(後書き)

マ”I

書かなきゃ良かった気がしなくてもないな

o r z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6105a/>

ガス

2010年12月14日17時43分発行